

7月のおはなし

「秘密の小島」

僕には夏の間だけ過ごせる秘密の小島があった。その島はある岬の先にあり、陸から見ると切り立った岩山にしか見えないが、その向こう側に誰も知らない小さな浜があった。

ただ、岬は切り立った断崖が続き、周囲は潮の流れも早く、その島に渡ることは不可能に見えた。だが僕はある人物に島に渡る方法を教わった。

1

ルバイトをしていた。

テマパークの大温室の裏から静かな入り江に降りる道があり、そこから夏の大潮の前後数日間、干潮の一時間だけ島の浜まで泳いで渡ることができた。その方法を僕に教えたのは同じ



の展望台の脇には数年前に閉鎖されたテマパークがある。以前、僕はそこでア

の死体は見つかっていない。

それ以来、僕は負い目のようなものを感じていた。あの日、僕も行動をとるにすべきだったかもしれない。

彼が死んで四年目の夏、僕はそういう色んな想いに区切りをつけるため、島に渡った。

アルバイトの先輩だった。彼と僕はその夏の一週間、島で一時を過ごした。最後の日、僕は用事で島に行けず、彼は一人で島に行くと言ってそのまま行方不明になった。おそらく潮を読み間違えたのだろう。いまだに彼



に着くと浜には意外な人物が僕を待っていた。

彼だった。

「来る頃だと思ってたよ」

彼は笑っていた。親しみとい

2



「君にここまで渡る方法を教えてるのは俺だぜ。おい、変な目で見るなよ。ちゃんと足もついてる」

僕

が言葉を飲み込んだのは、彼の服装がいなくなつた日のままだつたからだ。

「この浜は何年か一度、時間を滅茶苦茶に分断する嵐のようなものが起きるんだ。それに巻き込まれるとまったくでたらめな時間軸の中を生きることになる。多分君の世界では俺がいなくなつてから何年か経っていると思う。でも俺はここに来てま

うより呆れた感じだつた。その笑いの意味を僕は図りかねた。「どこにいたんです？僕はてっきり」

「溺れ死んだ、と思った？」

彼は僕が飲み込んだ言葉を引き継いだ。

だ二日目なんだ。俺と君が出会つたと言つことはまた嵐が始まつたということになる」

彼

は押さえきれず笑い出した。

「なぜ笑うと思う？俺は昨日、俺にここへ渡る方法を教えた人に会つたんだ。俺は聞いた話をオウムみたいに繰り返しているだけさ。でも彼もやはり誰かにそれを聞いている。伝言ゲームみたいなものさ。俺も今の君みたいな間抜けな顔をして彼の話を聞いていたんだろうな」

僕は最後まで聞かずに岬の方

角へ走り始めた。背後で彼が何か叫んだ。

腰まで水につかつて海を眺めると、物凄い勢いで潮が流れていた。大潮の時の流れ方ではなかつた。

振り返ると彼の姿は消えてい



た。僕も彼も、何時とは知れない時間の住人になってしまったのだ。

照

り付ける日差しの下、僕は遠く水平線を眺めた。この浜には異なる時間軸に無数の屍があるのかもしれない。波間に太陽が反射してきらきら光っていた。そしてこの島に行くことを話してしまった僕の恋人を思った。 ■



妄想の地平線

7月のおはなし

文 ハヤシアキオ 絵 凹工房

本書の無断複写・複製・転載を禁
じます。

© HAYASI AKIO & BOKOKOUBOU